

『新体詩歌』の出版を支えた人々

— 未紹介資料と諸本調査をもとに

青山英正*

一 はじめに

竹内隆信編『新体詩歌』第一集が刊行されたのは、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の編著によって『新体詩抄』が刊行され、旧来の和歌とも漢詩とも異なる新体詩の創始が宣言されてからわずか二ヶ月後の、明治十五年十月のことであった。編輯兼出版人は竹内隆信。製本発兌は甲府の徴古堂東浦栄二郎。体裁は活版摺中本で、以降同じ版型で第五集まで刊行された。第一から第五集まで各集とも明治十五年十月三日御届、定価十二銭で、出版年月や校閲者などは、以下の通りである。

- 第一集 明治十五年十月十日出版、小室屈山校閲・序。
- 第二集 同年十二月五日出版。
- 第三集 同十六年三月か四月出版、⁽¹⁾坂部広貫校閲・序。

第四集 同年六月二十二日出版、坂部広貫校閲、柳田斗墨序。
第五集 同年九月出版か（扉書きによる）、首藤次郎校閲・序、広瀬要人跋。

外山らによる『新体詩抄』の刊行は、漢詩・和歌・歌謡といった韻律に基づく既存の文芸形式を、欧米のポエトリーと同義の〈詩〉（以下、山括弧付きの〈詩〉を如上の意味に用いる）として統合・再編制する大きな契機となった事件であった。同書の「凡例」には、新たな〈詩〉の定義として次のように述べられている。

均シク是レ志ヲ言フナリ。而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ総称スルノ名アルヲ聞カズ。此書ニ載スル所ハ、詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ総称スルノ名ニ当ツルノミ。古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

「ポエトリー」〓〈詩〉はここに、それまで別の範疇にあった漢詩と和歌とを総称するものとして定義された。言い換えれば、前近代以来の文芸ジャンルである漢詩も和歌も、〈詩〉の一下位範疇として位置づけられたのである。もちろん右のような定義づけは、彼ら自身の創始した新体詩を既存の詩歌の上位に位置づけるために為されたものであったが、必然的に、過去の日本に蓄積されてきた詩歌を、あらためて「ポエトリー」〓〈詩〉の観点から編制し直すことを促す意味も持っていたと言える。そして、『新体詩抄』の直後に編まれた『新体詩歌』は、近代日本におけるこうした詩歌ジャンル再編制の、最初の具体的な試みであった。したがって該書は、『新体詩抄』によって掲げられた〈詩〉が、当初どのように理解されたのか、あるいは前近代の詩歌や文学論がその際どのように捉え直されたのか、といったことを明らかにする格好の材料であ

ると考えられるのである。

この『新体詩歌』についての本格的な研究が始まったのは、ようやく一九九〇年代末からであり、先鞭を付けたのは榊祐一であった。『新体詩歌』は、明治十五から翌十六年にかけての徴古堂版刊行の後、同十七年に甲府の書肆内藤伝右衛門より徴古堂版とほぼ同じ体裁で翻刻刊行され、さらに、同十九年におよそ二十の書肆から洋紙装活版摺四六半裁判一冊本として陸續と翻刻刊行される。榊はこの十九年の流行に注目し、同時期の唱歌や軍歌類の大量出現と関係づけたのである。また、二〇〇一年、新日本古典文学大系明治編に該書が収録されたのを契機として、各詩篇の出典や配列、あるいは内容についての検討も始まった。しかしながら、編者竹内を始めとして、関係者にいまだ経歴の明らかでない者が多く、また出典についても、これまでの研究によってある程度の見当がつきつつあるとはいえ、具体的にいかなる書物から採られたのかなど、必ずしも明瞭でない点が残されている。さらに、どのような経緯で出版されたのか、現存する諸本に版の異同はあるのかといった、該書の出版に関する基礎的な事実についても、これまで指摘されたことがない。

『新体詩歌』の文学史的意義を考察するためには、その前提として、関係者の経歴や出版の経緯などを、可能なかぎり実証的に明らかにしておく必要があるように思われる。本稿ではその第一歩として、未紹介資料などをとくに、まずは該書の関係者、特にこれまで未詳とされてきた人物に焦点を当ててみたい。

二 竹内隆信について（その一）

——来映から『新体詩歌』の編纂まで

該書の編者竹内隆信（節・嶮谷・海南とも）は、奥付によれば当時山梨県北都留郡甲東村（現上野原市）百十一番地寄留の和歌山県平民であった。⁽⁶⁾ 竹内編『新体詩選』（明治十九年刊）の自序に、

庚申之秋、余遊峡州。以事終留居焉。從此以来、山阻水涯、索居無聊、与时事日疎。

（庚申の秋、余峡州に遊ぶ。事を以て終に留居せり。此より以来、山阻水涯、索居無聊、時事と日に疎し。）

とあり、庚申すなわち万延元年に来映したらしい。

それ以降、『新体詩歌』編纂に至るまでの消息は不明だが、明治十年から翌十一年にかけて、甲東村およびその周辺の小学校教員に「武内隆信」なる小学校教員がいたことは、次の資料により確認できる。

● 「明治十年第一大学区山梨県管下公学校表」⁽⁷⁾

桑窪小学校 北都留郡甲東村 首座教員姓名 武内隆信

● 「明治十一年第一大学区山梨県管内公学校表」⁽⁸⁾

牧平および北原小学校 東山梨郡西保村 首座教員姓名 武内隆信

「竹内」ではなく「武内」と表記されている点が不審であるものの、わずか五年を隔てて同じ甲東村に別人の「たけうちたかのぶ」が存在する確率はさほど高くはないと思われ、また、徴古堂が『小学問答書』（明治十三年刊）や『小学読本字解』（同年刊）といった小学校教育関係の書籍を多く取り扱い、小室屈山、あるいは後述する坂部広貫や首藤次郎のように、『新体詩歌』に関与した者にも教員経験者が多い点などを勘案

すると、あくまでも推測ながら、小学校教員武内隆信が竹内隆信その人である可能性は決して低くないと思われる。

さて、『新体詩歌』第四集の、明治十六年六月下旬に記された柳田斗墨による序文に従えば、竹内は同十三年頃数ヶ月間神奈川県に滞在したことがあり、同十六年には東京に出ていたらしい。

余、僻谷竹内氏ト始メテ湘川ノ滯リニ相逢フ。同居スル数月タリ。一度秋ヲ別ツテヨリ爰ニ三年。復ビ東都愛宕ノ麓ニ邂逅シ、手ヲ握リ膝ヲ交ヘ、相語り相問フコト数刻タリ。氏、其編スル処ノ詩歌第四集ヲ以テ余ニ示シ、(後略)

柳田はこのように述べ、竹内と相模の地で知り合い、三年経った今、東京の愛宕下で再会したとしているが、それを裏付け、なおかつ『新体詩歌』刊行中の竹内の動向を明らかにする資料が、次に紹介する雑誌『随筆集誌』(第一〜五号〈明治十六年三月〜六月〉、東京大学明治新聞雑誌文庫蔵)である。同誌第一号の奥付をしてみよう(なお、記号「/」は原本における改行を表すこととする。以下同じ)。

社主 坂部広貫/主幹 柳田為十郎/編輯兼印刷 竹内節/仮本局
東京京橋区八官町拾五番地 涵養社

『新体詩歌』早稲田大学図書館衣笠詩文庫本(文庫3-401)第三集(明治十六年三月刊)奥付に記された竹内の住所はまさしく右と同じであり、したがって同年三月にはすでに上京し、雑誌編集に携わっていたと考えて間違いない。竹内は、同誌の「編輯兼印刷」を、第一から第三号(同年五月十五日発行)まで担当し、第四号(同年五月三十日発行)に、「小生儀、今般都合ニヨリ編輯ノ任ヲ解候間、此段愛顧ノ諸賢ニ報道ス 竹内節」との告示を掲げて退任した。

右に涵養社の社主として名前の挙がっている坂部広貫は、『新体詩歌』

第三・四集の校閲者、および第三集の序文執筆者その人である。該書第三集は明治十六年三月ないし四月の出版、第四集は同年六月の出版であるから、竹内と坂部とがともに涵養社にいた時期と、『新体詩歌』第三・四集出版の時期とはほとんど重なりあうことになる。そして、涵養社と該書第三・四集の出版との関係がこのように深いことを考えると、これまで不詳とされてきた第四集の序文執筆者柳田斗墨は、涵養社主幹柳田為十郎ではないかと推測することができる。

同社の所在地であった八官町は現在の銀座八丁目に当たる。同社は第二号(同年四月三十日発行)から芝区柴井町(現新橋五・六丁目)に移転しているが、八官町から愛宕山はさほど遠からず、柴井町であれば愛宕下町に隣接し、先に見た柳田斗墨の記述と合致する。何より柳田為十郎は、まさしく「湘川(相模川——引用者注)ノ滯リ」である神奈川県愛甲郡荻野村(現厚木市)に在住していた経歴を持つ人物であった。大畑哲によると、柳田為十郎は荻野村の山中学校の教員であり、後に大阪事件に連座した大矢正夫の同僚であったという。また彼は、後に自由党系の結社相愛社へと発展解消する厚木の親睦団体共話会(明治十四年六月結成)の一員として名を列ね、荻野村の豪農で当地の有力な自由黨員であった小宮保次郎の日記にも、為十郎が小宮に金談のため何度か面会し、上京後も寄留先の柴井町から連絡を取っていた記事が見出せる⁽¹⁾。

さらに、為十郎と斗墨が同一人物であるという推測を裏付けるのは、この小宮日記の明治十四年十月一日条の、「坂部広貫来、蚕種依頼ヲ受ル」という記事である⁽²⁾。『新体詩歌』第一集の校閲および序文執筆を担当した小室屈山が、自由新聞社員であったことはすでに知られているが、この記事は、屈山以外の該書関係者も、自由民権家との結びつきを有していたことを物語っている。そしてそれを踏まえた上で、柳田斗墨を為

十郎と仮定してみると、竹内、坂部、柳田斗墨、小室屈山という、これまでよくわからなかった『新体詩歌』関係者同士の該書刊行以前の動向ないし人脈が、見事なまでに交差することになるのである。

話題を『随筆集誌』に戻そう。雑誌の内容は、三浦梅園『梅園叢書』、大田錦城『梧窓漫筆』、志賀理齋『三省録』、祿宏『竹窓隨筆』、山崎美成『名家略伝』といった、和漢とりわけ日本近世の隨筆を集め、それらを嘉言・善行・文芸・故事・奇談・雑話・附録格言之部の各項に分類したものである。嘉言・善行は『小学』外篇の分類に拠ったと考えられるが、「故事」の項に、山崎美成『世事百談』から女衞の語源についての記事を取るなど、教訓の記事を中心に幅広い話題を盛り込んでいる。

想定する読者層は、第一・四号巻末に、晴念社『青年思叢』、第二号に大成教社『大成教誌』と明治義塾（千葉）『文学雜誌』、第三号に蒙求義館による詩文添削案内、第四号に川崎学社『花月集』（後述）、第五号には東京教育社『教育旬報』といった、主に青年層を読者対象としていたと推測される広告が並んでいることから、それらとほぼ同じであったと考えられる。

巻末広告の中で注目すべきは、同誌第一・三・四号に掲載された『新体詩歌』の広告である。第三・四号の文面はほぼ同じなので、第一・三号のみを見てみよう。

● 第一号（明治十六年三月二十日発行）

本社発兌書／竹内節編纂／新体詩歌第一二集既刻／每集定価郵税共金十二錢／此書ハ、漢詩ノ読難キモノト和歌ノ解シ難キモノトヲ採ラズ。方今普通ノ言語ヲ以テ、我大学文学士ノ西詩ヲ訳シ、或ハ西詩ニ摸擬シテ、一種新体ノ詩歌ヲ作出セラレシモノヲ、蒐集セシモノニシテ、慷慨痛切、人ヲシテ憤起セシムルモノアリ、或ハ報国尽忠、

人ヲシテ感泣セシムルモノアリ、或ハ雅致優婉、人ヲシテ喜慰セシムルモノアリ。故ニ、和漢洋ノ学者ハ勿論、苟モ仮名ニ通ズル者ハ、一読瞭然、其意ヲ解ツ得ラルベキ良書ナリ。請フ、江湖ノ諸君、熟読翫味シテ其妄ナラザルヲ知り給へ。

● 第三号（同年五月十五日発行）

本社発兌書／新体詩歌 第三集刻成○第一第二再版。每集定価郵便税共金拾二錢。此書ハ、我大学文学士、普通ノ言語ヲ以テ泰西ノ詩歌ヲ訳シ、又本朝ノ事實ヲ、彼詩歌ニ擬作セラレシ者ヲ集録セシ者ナリ。

これらは、管見に入った限り『新体詩歌』の最も早い広告である。また、ほかならぬ竹内自身が編集に携わっていた雑誌に掲載された広告であり、竹内が『新体詩歌』の意義をどのように理解していたかという点にも迫ることのできる資料と言える。

『新体詩歌』における竹内の発言は緒言にしか見られず、そのため該書刊行についての当事者の考えに迫るには、これまで小室屈山による序文などを検討するか、あるいは三年後に刊行された『評新体詩選』の自序などを参照するほかなかった。しかし、右の第一号広告における「慷慨痛切」「報国尽忠」「雅致優婉」といった分類や、第三号における「我大学文学士、普通ノ言語ヲ以テ泰西ノ詩歌ヲ訳シ、又本朝ノ事實ヲ、彼詩歌ニ擬作セラレシ者ヲ集録セシ者ナリ」といった理解の仕方には、『新体詩歌』編纂当時の竹内自身の認識が表明されているように思われる。

とりわけ後者は、『新体詩歌』緒言における竹内の発言、すなわち日本本の「歌」が中国の「箴」と本質的に同じであるという発言の真意を解き明かす重要な手掛かりになるだろう。漢文の文体を分類・定義した明

代の書『文体明弁』は「箴」を、「大抵皆用韻語、而反覆古今興衰理乱之變、以垂警戒、使讀者惕然有不自寧之心。(大抵皆韻語を用ひ、古今の興衰理乱の變を反覆し、以て警戒を垂れ、讀者をして惕然として自ら寧んぜざるの心有らしむ。)、すなわち韻文によって古今の歴史的事件を詠み、それによって讀者の戒めにするものと定義しているが、それと第三号広告における「本朝ノ事実ヲ、彼詩歌ニ擬作セラレシ者」という文言とを併せると、竹内が『新体詩歌』に収録しようとしていたのが、日本の歴史的事件を韻文の形で詠み、それをもって讀者の戒めとするものであったと読み解けるのである。

このように、本節で新たに紹介した資料は、竹内が漢文の素養を身に付けていたこと、書物の編纂に当たって教育的な姿勢をもって臨んでいたことといった、『新体詩歌』や『評新体詩選』〔記事〕『論說作文彙纂』などこれまで知られていた刊行物からもうかがうことのできた彼の人物像に、具体的な肉付けを施してくれるものであった。

のみならず、竹内が明治十から十一年にかけて山梨県内で小学校教員をしていた可能性、同十三年頃に相州の自由民権運動家との交流を持っていた可能性、『新体詩歌』刊行中の同十六年三月には上京し、同年五月までの間、東京の涵養社から発行されていた雑誌『隨筆集誌』の編集に携わっていた事実などを示す資料は、『新体詩歌』の編纂と刊行とが、『素居無聊』で「時事と日に疎」〔評新体詩選〕竹内序、(原漢文)い、孤立した地方の一知識人によって細々と行われていたのではなかったことをも物語っている。遅くとも第三集以降、該書の出版活動の拠点はほかならぬ東京にあったのであり、また、その背景にはおそらく相州自由民権運動の人脈があったと考えられるのである。

そして、興味深く思われるのは、彼らの学的人脈が、『新体詩抄』の

刊行に携わった人々よりも、むしろ北村透谷のそれに大きく重なる点である。従来、『新体詩歌』は、『新体詩抄』に追従しただけのものと思なされる傾向があった。『新体詩歌』と『新体詩抄』との関係の闡明は言うまでもなく重要だが、竹内らの学的人脈に関する右のごとき事実は、『新体詩歌』を含めた初期新体詩研究にとつて、自由民権運動との関わりのの解明が重要な意味を持つことを、物語っているように思われるのである。

三 竹内隆信について(その二)

——『新体詩歌』の出版とその後の活動

さて、このたび見出された『隨筆集誌』の重要性は右にとどまらず、該書出版における徴古堂以外の書肆の関わりを浮き彫りにしてくれる点にもある。涵養社が、自ら活版印刷事業を行っていたことは、『隨筆集誌』第三号に次のような「本社活版印刷廣告」が掲載されていることからわかる。

弊社儀、活版事業ニ一層勉強ヲ加へ、雜誌類・株券類・学校免状・手札・切手・引札等、精々安価ニ印刷仕候間、益御愛顧御注文アラ
ンコトヲ乞フ。但地方諸君ヨリ御注文之節ハ、詳細ノ御見本御運送
被下度、且ツ直段見積書ヲ要セラレ候時ハ、郵便切手式錢御封送次
第、御返答可申候。愈御注文之折ハ、御手金トシテ代価ノ式割申請
候事。

この広告と先に見た第三号の『新体詩歌』出版広告、そして「涵養社免」と見返しに記した『新体詩歌』第三集が国立国会図書館(図1)と先述の早大衣笠詩文庫に現存すること、それらの序文に用いられている

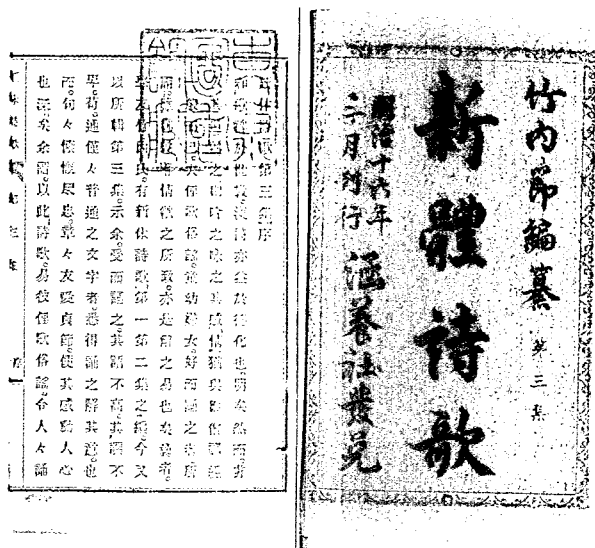


図1 国立国会図書館本

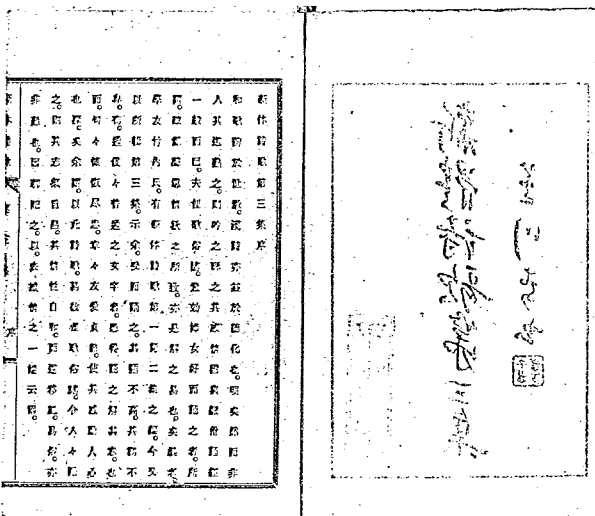


図2 山梨県立博物館甲州文庫本

活字が、山梨県立博物館甲州文庫本(図2)などの他本と明らかに異なっていること、および衣笠詩文庫本奥付に、竹内の住所として涵養社と同じ番地が記されていることなどを勘案すると、少なくとも国会本および衣笠詩文庫本の第三集については、徴古堂とは別に涵養社が独自に印刷した可能性が高いように思われる。

ここでその可能性を裏付けるために、該書の活版の異同について、管見に入った限りを記しておきたい。比較しえたのは、次の十二本である。なお、特に断りのない場合、第一〜五集までの完本を表し、また、⑥⑨に付したイ・ロの符号は、各所蔵機関の請求記号に関わりなく、あく

までも筆者による便宜上のものである。

- ① 国立国会図書館本(第一〜四集、YDM87995へマイクロフイッシュ番号)
- ② 日本近代文学館本(タケ301)
- ③ 高知市民図書館近森文庫本(近森文庫1592〜1596)
- ④ 跡見学園女子大学茗荷谷図書館本(911・5-SH69)
- ⑤ 早稲田大学図書館柳田文庫本(文庫111-A140)
- ⑥ 早稲田大学図書館衣笠詩文庫本イ(文庫3-400)
- ⑦ 早稲田大学図書館衣笠詩文庫本ロ(第一〜三集、文庫3-40)

1)

⑧山梨県立文学館本イ (K3-309-5)

⑨山梨県立文学館本ロ (第一、二集、911・56—シクタ)

⑩山梨県立博物館甲州文庫本 (第一、四集、甲911—シン)

⑪山梨県立博物館頼生文庫本 (第五集のみ、H099・15—1)

⑫東京大学附属総合図書館本 (第一集のみ、E33-455)

調査の結果、第一集から第五集まで順にそれぞれ五、三、四、二、二種の版が少なくとも存在することが判明した。一覧にして掲げよう。

●第一集

I A ①国会、⑨山梨ロ

I B ②近代

I C ③近森、④跡見、⑤柳田、⑧山梨イ

I D ⑥衣笠イ、⑩甲州

I E ⑦衣笠ロ、⑫東大

●第二集

II A ①国会、⑩甲州

II B ②近代、③近森

II C ④跡見、⑤柳田、⑥衣笠イ、⑦衣笠ロ、⑧山梨イ、⑨山梨ロ

●第三集

III A ①国会、⑦衣笠ロ (ただし、両者の奥付は異版)

III B ②近代、③近森

III C ④跡見、⑤柳田、⑥衣笠イ、⑧山梨イ

III D ⑩甲州

●第四集

IV A ①国会、④跡見、⑤柳田、⑥衣笠イ、⑧山梨イ、⑩甲州

●第五集

IV B ②近代、③近森

V A ③近森、④跡見、⑤柳田、⑥衣笠イ、⑧山梨イ、⑪頼生

V B ②近代

見返しに「涵養社発兌」と印刷されているのは、III Aの①国会本と⑦衣笠本のみである。そして、この両者は奥付以外同版でありかつ第三集の他の全てと異版の関係にあるから、両者はその本文も、涵養社による印刷と言えるように思われる。

とはいえ、異版本が全て異なる書肆によって印刷されたものだったわけではあるまい。というのは、たとえばII AとII C、III CとIII Dのように、活字によって刷られた丁は異版であっても、扉など製版によって刷られた丁は同版であり、なおかつ徴古堂による製本であることが扉裏や奥付に明示されているものが存在するからである。活字で印刷された丁に五種の版が見出せた第一集にしても、製版による見返しに限れば全て同版を用いていると思われる。確かに、該書は無版權図書ゆえ、自ら印刷を行う書肆が現れることに不思議はないが、何種もの異版が生じた要因は、むしろ、徴古堂が紙型を取らずに、売れ行きをにらみつつ増刷のたびに活字を組み直したことにありと考えるのが最も自然であるように思われる。実際、『新体詩歌』は増刷を繰り返すだけの好評を得ていたらしく、竹内自身、『新体詩選』の自序において次のように述べている。

前年余嘗、篇新体詩歌者。付之割刷。以公世焉。而此書何幸、猥蒙大方之愛翫。門外填咽、購客常作山焉。於此乎所在書肆、再刊三样、以応江湖百万之需。殆有洛陽紙価為貴之想。

(前年余嘗て、新体詩歌なる者を篇す。之を割刷に付し、以て世に

公にす。而して此の書何の幸ひか、猥りに大方の愛翫を蒙る。門外填咽、購客常に山を作す。此に於て所在の書肆、再刊三梓し、以て江湖百万の需めに応ず。殆ど洛陽の紙價貴と為るの想ひ有り。

翌十七年に甲府の大書肆であった内藤伝右衛門が翻刻版の出版に乗り出したのも、おそらくはこうした好評ぶりを目の当たりにしたことに起因すると考えられるから、江湖百万の需めに応じて該書が再三印刷に付されたという右の発言は、そこに多少漢文的な誇張が含まれるとはいえず、決して偽りとは言いい切れまい。それに加えて、竹内が別の新体詩集である『評新体詩選』を含め、その後もいくつかの出版物を手掛けることになったのも、該書の売れ行きが好調だったからこそではないかと推測されるのである。

そこで、管見に入った限りで、その後の竹内の足跡を以下に辿ってみよう。まず、明治十七年九月二十日付で内藤伝右衛門が山梨県令を通じて内務省に提出した、『記事要覧漢文軌範』の「出版々権願書」（山梨県立博物館甲州文庫蔵）に、編纂人として「和歌山県平民／竹内隆信／東京麻布区宮村町六十一番地」とあるのが見出せる。同願書には、「明治十七年十一月出版」と記され、同年十月九日付で同書の「版權免許之証」（同文庫蔵）も下付されているが、内務省図書局発行「出版書目月報」の当該年月にその書名は見当たらず、同書が実際に出版されたかどうか確認できない。

翌十八年八月には、竹内の編纂による『記事要覧作文彙纂』（上下二冊、国立国会図書館および山梨県立博物館頼生文庫に上巻のみ現存。同二十四年の増補訂正版は国立国会図書館蔵）が、甲府の芳文堂から出版されている。同書の校閲は、『新体詩歌』第五集の校閲と序文執筆も担当した首藤次郎。奥付によれば、竹内の住所はやはり麻布区宮村町である。

また、同書が版權免許を取得した日付は同十七年十一月十日であり、前述『漢文軌範』の版權免許取得日とわずか一ヶ月違いである。あくまでも書名のみからの憶測ではあるが、類似した内容の出版計画が別の書肆からほぼ同時に立てられていたことになろうか。少なくとも、『作文彙纂』刊行までの時点で内藤伝右衛門が『漢文軌範』の版權を取り下げた事実は、『官報』の「版權書目広告」に見出せない。なお、『作文彙纂』の内容は、凡例によれば「博く古今ノ文集ヨリ拔萃蒐集シテ初学作文ノ軌範トナス」ものであった。ただし、収録している文章が漢文ではなく、全て漢文訓読調の漢字カタカナ交じり文で記されているのは、「初学作例ノ指南タリト雖ドモ傍ラ復文ノ一助ニ供セントス」（同書凡例）る、教育的配慮によるとされている。

次いで同十九年九月には、竹内の編による『評新体詩選』が、日本橋通四丁目の春陽堂和田篤太郎から出版された。⁽¹⁴⁾奥付によれば、竹内は当時、「芝区西久保明舟町八番地加藤波吉方」に移っていた。校閲および跋は、またもや首藤次郎である。

このアンソロジーには、宮崎真素美が「花柳に材を取ること新体詩において『情』の蘇生が試みられた」と述べた通り、桶狭間の戦いや楠木正成といった歴史上の事件や人物に材を取った漢詩が収録される一方で、吉原の風物を詠んだ新体詩「不夜城の詞」のごとき、『新体詩歌』には見られなかった新体詩版竹枝とも言うべき作も収録されている。にもかかわらず、竹内の編纂方針は、少なくとも表面向き「新体詩歌」を継承し、「此編則一皆是、美人香草、忠臣義子之寓言也」（自序）と強弁するのである。「美人香草」とは、『楚辞』のことを指す。古来、楚辞学においては、王逸『楚辞章句』離騷経の注に、

離騷之文、依詩取興、引類譬喻。故善鳥香草、以配忠貞、惡禽臭物、

以比讒佞。靈修美人、以媿於君、宓妃佚女、以譬賢臣。

(離騷の文、詩に依りて興を取り、類を引きて譬喩す。故に善鳥香草、以て忠貞に配し、惡禽臭物、以て讒佞に比す。靈修美人、以て君に媿し、宓妃佚女、以て賢臣に譬す。)

とあるように、「美人」を君主の比喩、「香草」を忠貞の比喩として解釈してきた。したがって、「美人香草」とは宮崎の言うように、「(忠臣義子)の漢詩群に並んで置かれ、対をなす」のではなく、むしろ竹内はここで、一見花柳界のことを詠んでいるかのような作にも、実は忠義に關する道德的な寓意が込められていると主張しているのである。むしろこれが強弁であるのは明らかで、「不夜城の詞」に付された立花梯村と首藤の評語は、床入りの場面で揃って「垂涎」してしまふ有り様であるから、竹内の序文末尾に「客笑而去」とあるのは、竹内の強弁のおかしみを笑ったのであり、またこれを記した竹内も、自身の主張の無理を十分自覚していたと考えるべきだろう。そして、明らかな無理を承知でもなお、表向きは教育者然とした姿勢を崩さないところに、『新体詩歌』から一貫した竹内の文学観がうかがえるように思われる。

管見に入った限りでの竹内の最後の著作は、明治十九年十二月に、『新体詩選』と同じく春陽堂から出版されたウェブスター著『正則スペルリング独案内』の翻訳である。奥付による竹内の住所は、『新体詩選』に記されたものと同じである。同書は、すでに多くの者の手で邦訳、出版されていた英語綴り字教本『The Elementary Spelling Book』に「新たな邦訳を付したものである。こうした著作をものした以上、英語の知識もある程度は身につけていたと考えられるが、同書に載る英文はあくまでも初級レベルにすぎないため、竹内の英語読解能力がいかほどのものであったかは定かでない。

以上、『新体詩歌』の諸本を調査し、分類した結果を踏まえて、東京において涵養社が該書を自ら印刷、製本した可能性、および徴古堂が該書の売れ行き的好調さを受けて何度か増刷を行った可能性など、該書の出版に關わる推測をいくつか試み、併せて『新体詩歌』刊行以降の竹内の活動を追った。

『新体詩歌』の好評ぶりを契機として始まった竹内の著述活動は、漢詩文を軸として、新体詩、英語の各分野にわたっていた。そして、それらの著作はおおむね初学者向けに作られており、また、そこにはしばしば初学者に向けた竹内の教育者としての姿勢や配慮が見られた。二冊ある彼の『新体詩集』の場合も、たとえば『新体詩歌』において、凡例であらかじめ新体詩を「箴」、すなわち歴史上の事件を通じて読者を戒める文体と結びつけ、『評新体詩選』においても、収録された詩篇を「美人香草」＝『楚辞』の解釈法、すなわち語句の表面上の意味とは異なる道德的な寓意を読み取る方法に倣って解釈するよう、自序で読解の方向付けを行っていた。つまり竹内は、彼の身に付けた中国の文学理論を援用して、新体詩の存在意義を教育的効用性に見出そうとしていたのである。

ただし、「箴」にしても伝統的な『楚辞』解釈法にしても、一見道德とは無関係な内容から何らかの教戒を読み取ってみせる点に特徴があり、数ある文学理論の中から竹内があえてそうしたものを選んだのは、『新体詩歌』における箴曲の歌詞や和学者の長歌、あるいは『評新体詩選』における「不夜城の詞」のように、収録された詩篇が必ずしも道德的内容を持ったものばかりではなかったからにはかななるまい。すなわち、「流暢円滑水の流るゝが如き」であり、「花の如く」「笑ふが如く愛嬌に満ち」(磯貝雲峰「国詩論」『六合雜誌』明治二十六年三月)た七五調を用いた新体詩に、早くも見られ始めた「輕薄浮華に流れ易」(同上)い

傾向を、竹内はその教育的な姿勢によってかろうじて抑止しようとしていたのではなかっただろうか。

四 坂部広貫について

第三・四集の校閲および第三集の序文執筆を担当した坂部広貫（雨軒）は、先に見たように明治十六年当時涵養社の社主を務めていた人物である。千葉県の士族の出で、明治十一年八月に出版した『比例新書』の上領義質による序文に、「氏潜心於数学有年矣。（氏、数学に潜心して年有り。）とあるように数学に長じていたらしく、『利息損益新書』、『開方新書』、『級数新書』、『問答通常物件』（以上明治十二年刊）、『小学珠算校本』（同十六年刊）といった数学入門書を多く執筆している。なお、これらの奥付に記された住所は、明治十二年の時点までは小田原、同十六年一月の『小学珠算校本』では愛甲郡飯山村であり、神奈川県内を転々としていたらしい。その間厚木の自由民権家小宮保次郎と交わり、その後明治十六年三月から六月にかけて涵養社社主に就いたこと、ちょうどその期間に『新体詩歌』の出版に関わったことは先述の通りである。明治二十一年に、坂部は『俗家庭教育論』を著す。当時の住所は「東京小石川区江戸川町一番地」であるが、同書緒言によれば「所謂家庭教育育なるものを改良し、且つ其進歩を謀るべきハ当今の急務なりとハ教育者の常に唱ふ処にして、余ハ現に命を福島県伊達郡小学督業に受け、地方の実況を観察して此の感情ハ一層の深きを加へたり」とあり、それ以前に福島の小学校教員を経験していたことがわかる。また、同二十六年には八王子の浅川村立上柵田学校の校長に就任し、その年のうちに退任したことが『八王子市史稿本』第十三集（八王子市中央図書館蔵）に見

出せる。⁽⁸⁾ 函館に移ったのはそれからまもなくのことと思われ、同三十年に著した『^{海員受}海員算術書』の自序に、その経緯について次のように記している。

予教育ニ従事スルコト多年、傍ハラ数学ヲ嗜ム。偶感スル所アリテ易書ヲ読ム。其理高遠ニシテ趣味尤深キヲ覚ユ。乃チ二三ノ専門家ニ就キ之ヲ学ビ、稍其意ヲ得タリ。因テ数年前教育社会ヲ辞シ、飄然去テ北海ノ浜ニ到リ閑日月ヲ送ル、両三年。時ニ明治廿七、海員二三ノ諸氏ト数学ヲ談ズ。

右の記述に従えば、教職を辞し東京を去ったのは、遅くとも明治二十六年のことであろう。そして函館に居を卜した後、そこでも請われて再び数学参考書を著すことになったのである。このように、坂部は数学を得意分野として、神奈川、東京、福島、函館と、東日本各地で教員として、あるいは執筆活動を通じて長年教育に携わった人物であった。

『新体詩歌』第三集の坂部による序文は、「和歌裨於世教、漢詩亦益於徳化也、明矣。（和歌は世教に裨し、漢詩もまた徳化に益するや、明らかなり。）」といった儒教的文学観を表明する一文に始まり、その観点から『新体詩歌』を、

句々慷慨尽忠、章々友愛貞節、使其感動人心也深矣。余謂、以此詩歌、易彼俚歌俗謡、令人々誦之、則其志氣自昌、其情性自和、而遂移風易俗、亦非難也。

（句々慷慨尽忠、章々友愛貞節、其の人心を感動せしむるや深し。余謂へらく、此の詩歌を以て、彼の俚歌俗謡に易へ、人々をして之を誦せしむれば、則ち其の志気は自づから昌んに、其の情性は自づから和やかに、而して遂に風を移し俗を易ふること、また難きにあらざるなり。）

といった具合に、もっぱら「移風易俗」(風俗をかえ、世の中をよくする)の手段として評価している。この語は、『詩経』大序に見られ、『礼記』や『孝経』といった儒教の基本図書にも引かれてきたものである。

小室屈山が第一集の序文で唱えたのは、簡単に言えば「西洋諸国ノ詩」のあり方を目指して、「今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル」ことであつた。

また、後述の首藤次郎が第五集の序文において述べたのは、該書の収録作が「千様万態」であるために、「此ノ編ヲ読ム者」が「魚龍曼衍ノ戯ヲ観ル如ク、黄帝咸池ノ楽ヲ聴ク如ク、心目眩乱精神酣暢、奇ト称シ快ト呼ビ、樵漁婦女ノ愚ニ至ルマデ、皆ナ詩歌ノ楽シ」めるということであつた。それに比べると、右に見た坂部の発言には、彼の教育者としての立場が鮮明に打ち出されているように思われる。その意味で、坂部の文学観は竹内に近いと言え、実際詩篇から忠などの儒教的徳目を読み取ろうとする点は共通する。ただし、『新体詩選』に至つて詩篇の内容と道徳との乖離を意識せざるをえなかつた竹内と比べると、少なくともここで披瀝されている坂部の文学観は、儒教におけるごく常套的な文学観に、やや楽天的に依拠したものであつた。

五 首藤次郎および広瀬要人について

第五集の校閲および序文執筆を担当した首藤次郎(蜻民)と、第五集の跋文を執筆した広瀬要人(桜陵)は、ともに東京芝二本榎の漢学塾川崎学社の教員補助であつた。生年はいずれも不詳だが、先に紹介した『新体詩選』の「王政復古の歌」に付された粧鉄兜なる者の評語に、戊辰戦争について「如蜻民子者、齡猶少、未及知之耳。(蜻民子の如きは、齡猶少にして、未だ之を知るに及ばざるのみ。)」と記されているこ

とから、首藤は多く見積もつても明治十六年の時点で未だ三十歳には届いていなかったと推測される。

川崎学社とは、明治九年八月に東京府士族川崎義門(鶴峯・子徳)によつて創立された川崎学舎(川崎学校とも)⁽¹⁹⁾を母体として、全国に社員を有していた学社である。川崎は沼田藩儒川崎也魯齋(魯齋・魯助)の養子で、元治元年から慶応三年にかけて大学頭林学齋に学んだ後、万延元年から明治四年まで藩校沼田学舎(維新後は沼田県学校)において助教兼寮長を務めた人物である。⁽²⁰⁾也魯齋は佐藤一齋の門人で、一齋の紹介で林述斎にも入門しており、明治元年には昌平学校の教授試験に任命されて⁽²¹⁾いる。したがって、也魯齋・義門ともども昌平學校の学統を受け継いだ儒者であつたとまずは言えよう。二本榎の校舎における同社の授業内容や対象生徒には多少の変遷があるものの、明治十六年の時点では、漢文・修身・歴史を、十四歳以上ないし小学校卒業程度の学力を有する者に教授していたといふ。⁽²²⁾

「野州芳賀郡人」の「首藤次郎 号蜻民」の詩が、この川崎学社発行の社内投稿誌『進徳余誌』(第一〜四号〈明治十六年一月〜同年五月〉、国立国会図書館蔵)に掲載されたのは、同年二月発行の第二号であつた。

送桜陵君之遊学川崎学社

陽関三疊酒杯乾。折尽垂楊欲別離。從此小書樓上月。与誰同読与誰看。

(陽関三疊酒杯乾く。尽く垂楊を折り別離せんと欲す。此より小書樓上の月。誰とともにか読み、誰とともにか看ん。)

桜陵とは、広瀬要人のこと。右の詩によれば、『新体詩歌』第五集に名を列ねる首藤と広瀬とは、栃木県に住む同郷の知己であり(後述の『花月集』奥付に、兩名が「栃木県平民」と記されていることも、それを裏

付ける)、広瀬は一足先に川崎学社に遊学すべく東京に上ったものと見える。そして、首藤は当初、栃木の地に留まったままこの『進徳余誌』に詩を投稿したのであった。

そもそも同誌は、同学社が行っていた郵便による詩文添削業の一貫としてであった。川崎は明治十四年三月から通信添削業を開始し、それが好評だったことを受けて、同年七月に、「今般更ニ一社ヲ創立シ、社員三千人ヲ募集」すること、入社希望者にはあらかじめ五年分の授業料を納付させ、「漢籍ニ限り、経史ノ質問ヲ始メ経書ノ弁書、詩文ノ添削ニ至ル迄」を「広く全国ニ及サント」することを東京府に申し出、その際の規程書に盛り込んだのが、「本社ニ於テ、社員ヨリ投稿中詩文ノ佳絶ナル作ヲ拔萃シ、毎月一冊号ヲ逐テ発兌シ、社員中へ必頒ツ」こと、つまり社内投稿誌の発刊であった。⁽²³⁾これがすなわち『進徳余誌』であり、首藤と広瀬とは、栃木においてこの通信添削を受けるべく同社に入社し、それが機縁となって上京したと考えられる。

広瀬の上京後、まもなく首藤も広瀬の後を追ひ、広瀬ともども社内でのその実力を認められていったようだ。同誌第四号(同十六年五月)に詩が掲載された首藤と広瀬兩名の肩書きは、いずれも「川崎学社内教員補助」となっている。まずは首藤の詩を見てみよう。

尋花

花是可探詩可探。從江北至江南。村嬢又解風流意。閑折瓊葩換玉簪。

(花は探ずべし、詩探ずべし。江北より江南に至るに、村嬢又風流の意を解し、閑にして瓊葩を折り、玉簪に換ふ。)

「江」とはここでは隅田川であろう。村の娘がゆったりとした様子で、花の枝を折り、それを簪の代わりに髪に挿した、という情景と「江南」という広々とした土地とが相俟って、春ののどかさや華やかさがひととき

わ印象づけられる詩である。一方、広瀬の詩は次のようなものであった。

深夜憶郷

單身千里幾時還。夜々思郷不得眠。何処遠鐘宵欲午。青灯伴我倍凄然。

(單身千里、幾時か還らん。夜々郷を思ひて眠るを得ず。何処の遠鐘か、宵半ならんと欲す。青灯我を伴ひて、ますます凄然たり。)

青雲の志を抱き、笈を負い上京して数ヶ月、望郷の念が募って眠れぬ苦しさは詠まれている。わずかこれだけの詩を手掛かりとして彼らの詩風について論じることはできまいが、首藤については、その遊蕩ぶりが、「朝ニ芳原ノ花ヲ折り、夕ニ品川ノ月ヲ弄ビ、新橋ニ嘯キ柳橋ニ吟ジ、朝々夕々時トシテ酔ハザルナク、以テ大患ヲ醸成シ」(首藤次郎『いろは別和英字林』(明治二十二年刊)立花武良序)たほどであったと記され、また首藤自身、『評新体詩選』の跋文において、自らの好む桜花と美人の姿態との取り合わせを六種も挙げ、「予花候、常弄此六趣」と屈託なく述べていることなどを思い合わせると、右の首藤の詩にも、いわば「風流の意を解」する彼の性向が表れているように感じられる。

川崎学社は『進徳余誌』に続けて雑誌『花月集』(第一〜五号)同年六月〜十一月、東京大学明治新聞雑誌文庫蔵)を発刊した。これは、会費を支払えばその会員の「芳名ヲ不朽ニ伝」えるべく、各人の投稿作を「添削ノ上必ズ一首ヲ撰録シ、一部ヲ呈ス」(『進徳余誌』第三号巻末広告)と約束した雑誌であった。首藤と広瀬は同誌の発刊に際し、一層責任のある役割、すなわち首藤は同誌の編輯人を、広瀬は出版人を任されることになる。そして、首藤と広瀬の兩名が『新体詩歌』第五集の序と跋を執筆したのは、この『花月集』が刊行継続中であった明治十六年八月のことであった。

互いに上京して約半年にしかならない彼らと竹内とが、いかにして面識を持ったのかは定かでないが、先述の『隨筆集誌』第五号（同年六月発行）には『花月集』第一号の広告が掲載され、その広告の左に「右両書（雑誌『教育旬報』と『花月集』を指す——引用者注）ノ外、諸雑誌等本社ニ於テ大取次仕候間、不限多少御注文之程願上候也」という「本社（涵養社を指す——引用者注）出版部」の広告が見られることから、少なくとも涵養社と川崎学社との間には雑誌の流通や広告掲載等の業務を通じて交流が生じていたと考えることができる。第五号発行の時点ですでに竹内は『隨筆集誌』の編輯人から退いていたとはいえ、おそらくそうした業務上の交流が、個人的な交流へと発展したのではないだろうか。

その推測の当否はさておき、竹内と首藤とはほどなく懇意になったようだ。竹内編『記事評説作文彙纂』（明治十八年刊）の校閲および『評新体詩選』（同十九年刊）の校閲と跋文執筆を、首藤が務めたことはすでに述べた通りである。カナダ・メソジスト派の宣教師チャールズ・イビーを築地に竹内が訪ねたのも、首藤を伴ったことであつた。『評新体詩選』の外山正一「耶蘇弁惑一節」に付した竹内の評語には、次のように記されている。

余嘗、与蜻民小史首藤子、訪英国宣教師伊比氏於築地。氏蓋、小史之嚮執贊而從遊者也。

（余嘗て、蜻民小史首藤子と、英国宣教師伊比氏を築地に訪ねたり。氏は蓋し、小史の嚮に贊を執りて從遊する者なり。）

柳田泉が、かつて首藤を「イギリス学においては一時有名であつたイビー氏の弟子であつた」と述べたのも、右の記述を踏まえてのことと思われる。首藤は、同二十二年に簡易和英辞典『いろは別和英字林』を自ら

編輯兼発行人となつて刊行しているが、その校閲をやはりメソジスト派の宣教師キーリングに依頼している。立花武良の序によれば、同書は同十六年に出版の予定だつたのが、先にも見たように首藤の放蕩とそれに起因する大病とで延期になつたものである。立花は当時を振り返って、「今日ノ挙動勤嚴ニシテ事ヲ勉メスルノ果斷ナルニ似ザルナリ。語ニ曰ク君子豹変スト、其レ君ノ謂歟」と述べており、どうやら十六年以降首藤は改心し、生活を立て直したようだ。なお、奥付に記された首藤の住所「芝区西久保明舟町八番地」は、明治十九年の『評新体詩選』および『評新体詩選』刊行当時の竹内と同じであり、竹内との縁はここに至つても深い。

首藤や広瀬が、昌平齋の流れを汲む川崎学社の教育を受け、そこで若くして教員補助や雑誌の編輯を任されたということは、彼らが漢詩文に關して前途を有望視されるだけの能力を備えていたことをうかがわせる。もっとも、広瀬はともかくとして、資料から浮かび上がる首藤の人物像は、謹嚴実直な道学者というよりもむしろ酒色を好む放蕩児であつた。そして、首藤の快樂主義的な性向は、先に見た彼の『評新体詩歌』に対する評価、すなわち収録作に「奇」や「快」を求める評価のあり方とも相通するように思われる。もちろん首藤は、それに續けて、「詩歌ノ樂シムベキヲ知ラバ、漸ク遙カニ学ノ門牆ヲ望ムベシ」といった具合に、詩歌の快樂が学問を始める契機になると述べはするのだが、その立論はあくまでも「詩歌ノ樂シムベキ」ことを中心に組み立てられており、その点において、詩歌を「箴」や「美人香草」として捉えようとしていた竹内や、「移風易俗」の手段と見ていた坂部とは異なる文学観を示していたと言えるだろう。

六 おわりに

以上、『新体詩歌』の出版に関わった者の経歴について、未紹介資料に多く基づきながら見てきた。『新体詩歌』と教育との関係についてはすでに宮崎真素美の注目するところであったが、今回紹介した、首藤と広瀬とが漢学塾において教員補助をしていたことを示す資料は、竹内が小学校教員をしていた可能性を示す資料と併せて、『新体詩歌』関係者と教育との結びつきを一層裏付けるものであったと言えよう。

また、竹内、坂部、柳田が相模の自由民権活動家と何らかの交流を持っていたと思われること、『新体詩歌』刊行中に、彼ら三名が東京の地で雑誌『随筆集誌』の編集に携わっていたこと、その『随筆集誌』に広告を出していた『花月集』の編輯人首藤および出版人広瀬が、ともに『新体詩歌』第五集に関与していたこと、さらには『随筆集誌』を発行していた涵養社が『新体詩歌』の出版も行っていたらしいことは、『新体詩歌』の出版が、東京を中心とする出版・文芸・教育活動を通じて築かれた、漢学を共通の素養とする知識人の人脈によって支えられていたという、これまで重視されなかった側面を浮き彫りにするであろう。

そしてこのことは、『新体詩抄』の井上哲次郎による序文が、『二程全書』における程頤の言を新体詩創始の論拠としていたのと同様、『新体詩歌』の序跋にも漢籍を典拠とする表現が多く引かれていたことに、あらためて注目させるはずだ。従来、『新体詩抄』や『新体詩歌』は、欧米文学思想の受容史の一貫として、あるいは近代国民国家論の枠組みの中で語られることが多かった。もちろんそうした要素は実際多分に見出せるとしても、初期新体詩の研究を一層精密なものとするためには、既

存の文学観や教育観、とりわけ漢学のそれとの関係を解き明かすことが不可欠であるように思われる。たとえば、竹内が『新体詩歌』に適用しようとした「箴」という文体や、『評新体詩選』に適用しようとした『楚辞』の解釈法が、当時漢詩文に携わっていた人々にどのような捉えられていたのかを明らかにすることは、新体詩における教戒性の具体的な内容を知る上で、まことに重要な課題であると思われる。

ただし注意すべきは、彼らの経歴の一端を探る過程で浮かび上がったように、『新体詩歌』の編纂・出版に関与した者同士であってもその出自は必ずしも一様でなく、したがって該書に対する評価の姿勢にも相違が見られる点である。『新体詩歌』や『新体詩選』において、竹内は新体詩に「箴」や「美人香草」を見ようとし、小室屈山は「今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル」ことを唱え、坂部は「移風易俗」の手段として捉え、首藤は「奇」や「快」であることを評価していたように、新体詩をめぐる文学観は、決して一つに集約されるものではなかった。

新体詩という新しいジャンルは、様々な出自と立場を持つ者が、儒教や欧米由来の進歩主義思想などに基づく文学観を、それぞれ託すことのできる器として見出された。しかし、明治十年代ははまだ、そこに統一的な見解が成立していなかったと見るべきであって、ましてや複数の者の手によって成り立っているアンソロジーであれば、なおさら多様な文学観をそこに孕んでいたと考えるのが自然であろう。したがって、『新体詩歌』や『新体詩選』を今後検討する際に必要なのは、その多様性を一つに還元してしまうことではなく、人々がいかなる立場からいかなる評価をしたのかを具体的に検討し、それを通じて当時の文学観の複雑な交錯のありさまを浮き彫りにした上で、あらためて新体詩創始の文学史的意義を考察することではないかと考えられるのである。

注

- (1) 早稲田大学図書館衣笠詩文庫本(文庫3-401)の奥付刊記には三月十日出版と印刷され、国立国会図書館本の奥付には四月十一日出版と書き込みがされている。『出版費目報』は四月分に記載。
- (2) ただし、同書肆から異版本が出版されたり(たとえば鶴声社版(早大衣笠詩文庫本、文庫3-408と3-409)、逆に異なる書肆から同版本が出版されたり(たとえば春祥堂版(早大衣笠詩文庫本、文庫3-407)と開文堂版(同文庫3-422)と、出版の様相は複雑であり、今後精査の必要がある)。
- (3) 袴祐「明治十年代末期における『唱歌』/『軍歌』/『新体詩』の諸相」(『日本近代文学』一九九九年十月)。なお、同じく十九年の流行に着目した論考に、山本康治「新体詩流行の背景と軍歌——明治期学校教育の場における力学」(『東海大学短期大学紀要』第三七号、二〇〇三年)がある。
- (4) 阿毛久芳・明治詩探究の会他編『新体詩 聖書 讚美歌集』(新日本古典文学大系 明治編12 岩波書店、二〇〇一年)。
- (5) 宮崎真素美「明治初期『新体詩』と古典文学——小室弘『花月の歌』をめぐって」(『愛知県立大学説林』第四九号、二〇〇一年三月)、同『新体詩歌』の語るもの——文芸・政治・教育の交差する場所」(『文学』二〇〇四年五月・六月)。
- (6) 明治十九年刊の和楽堂版(早大柳田文庫1-1A14)および同年刊金泉堂版(早大衣笠詩文庫3-411)のみ「和歌山県士族」としているが、竹内による他の編著書はいずれも「和歌山県平民」としている。
- (7) 山梨県立図書館編『山梨県史』第七卷(山梨県立図書館、一九六四年)四六四頁。
- (8) 山梨県立図書館編『山梨県史』第八卷(山梨県立図書館、一九六五年)三七五、三八〇頁。
- (9) 大畑哲編『神奈川の自由民権——小宮保次郎日誌』(勁草書房、一九八四年)二九頁。
- (10) 神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史』資料編十三(近代・現代三)(神奈川県、一九七七年)八一頁。
- (11) 前掲注9書。
- (12) 同書、一六頁。
- (13) 「不言詩撰」而言詩歌者、在彼言箴、在我言歌、其理同也。観者莫為異以焉。」(詩撰と言はずして、詩歌と言ふは、彼に在りては箴と言ひ、我に在りては歌と言ふ、其の理同じければなり。観る者異なりと為すに焉を以てするなかれ。)
- (14) 同書についての先行研究には、宮崎真素美「竹内隆信編『纂評新体詩選』の試み

- 〈花柳の情〉をうたうこと」(『日本近代文学』二〇〇六年五月)、同竹内隆信編『纂評新体詩選』とキリスト教——外山正一「耶穌升感一節」をめぐって」(『愛知県立大学説林』第五五号、二〇〇七年三月)、同「新体詩集の言葉——竹内隆信編『纂評新体詩選』の試み」(『言葉の文明開化』学術出版会、二〇〇七年)がある。
- (15) 宮崎、前掲注14論文「竹内隆信編『纂評新体詩選』の試み——〈花柳の情〉をうたうこと」。
- (16) 同右。
- (17) ウェブスターのスペリングブックの明治期日本における受容については、早川勇『辞書編纂のダイナミズム——ジョンソン、ウェブスターと日本』(辭書社、二〇〇一年)第十章を参照。
- (18) 八王子市史編集室編『八王子市史稿本』第十三集(八王子市、一九六一年)三五頁。
- (19) 「私学開業願」(東京都公文書館蔵、「開学願書第三号」(607・D8・12))。
- (20) 川崎義門「訓蒙韻語日本国尽」(明治十二年刊)柳村金枝健序に、「吾、幼時入先君子魯齋先生之門、受業。先生有女無男。乃養子徳以二女配之、為嗣、及先生没承後業。」とある。
- (21) 前掲注19資料。林家の門人候である『升堂記』(東京大学史料編纂所蔵)には、元治元年九月二日入門として、「紹介川崎魯助 土岐山城守家来/川崎魯助俵/川崎周次」と記されている。前掲注20書に照らせば、この「周次」が川崎義門であると考えられる。
- (22) 前掲注21書『升堂記』天保七年四月六日条。
- (23) 沼田市史編さん委員会編『沼田市史』通史編二(沼田市、二〇〇一年)六五二—六五三頁。
- (24) 「私立学校開申書」(東京都公文書館蔵、「回議録」第六類・私立各種学校書類・中巻・明治十五年自五月二十五日至十月十一日)〈612・A3・1212〉。
- (25) 「私立学校追科届」(東京都公文書館蔵、「回議録」第六類・私学書類・3)〈612・D4・07〉。
- (26) 柳田泉「明治初期の文学思想」下(春秋社、一九六五年)二一九頁。
- (27) 拙稿「新体詩抄」と明治初期の『歌』(藤井貞和・エリス俊子編『シリーズ言語態2 創発的言語態』(東京大学出版会、二〇〇一年)参照。なお、この程願の言は『論語集注』泰伯篇にも見られる。

*引用に際しては、適宜句読点・濁点等を補い、旧字体を通行の字体に改めるなど表記を変えた箇所がある。また書き下しはすべて筆者による。